

イタリア語話者のための会話教材における発音表示

小林 ミナ (早稲田大学)、藤井 清美 (金沢工業大学)、柳田 直美 (一橋大学)

要旨

本発表では、イタリア語話者のための会話教材で日本語の発音を表示するためのローマ字表記について考察した。イタリア語を母語とする日本語学習者のためのローマ字表記に焦点をあて、後述する2種類のデータに基づき、その特徴を分析した。その結果、(1) イタリア語話者のためのローマ字表記では、拗音、半母音の表記に特徴が見られること、(2) 英語話者のためのローマ字表記とは多くの点で異なるものであること、の2点が明らかになった。

1 はじめに

本発表では、会話教材で日本語の発音を表示するためのローマ字表記について、イタリア語母語話者を事例に考察した。

音声コミュニケーションの教育においては、文字を介さず、音声だけを媒体とする方法も可能である。しかし、文字媒体がないことを不安に思う学習者、教材への記載などを考えると、何らかの表記手段があったほうがよい。ただし、そこに日本語の正書法や表記体系が介在する必然性はない。たとえば、学習者が自らのノートに「おはようございます」「おあよ:ございま s」などと記したとしても、本人の中でその表記が「おはようございます」という音声産出と結びついているのであれば、何ら問題はない。日本語教育においては、従来、ローマ字による日本語表記が学習者の日本語の「音としての理解、産出」を助ける手段として使われてきた。ローマ字による日本語表記が学習者の日本語の「音としての理解、産出」に役立つためには、学習者の母語における表記と音の結びつきを考慮して、母語ごとに開発される必要がある。

以上の問題意識から、発表者らは「学習者の母語を最大限に配慮し、母語ごとに開発されるべきである」という観点から、研究を進めてきた (小林・藤井・柳田 2014, 印刷中, 野田・中北・島津・宮崎 2015)。

2 調査方法

調査の目的は、日本語を「音として理解、産出すること」を目的とするローマ字表記が母語によって異なるかどうかを明らかにする」「母語を配慮したローマ字表記を作成する際の留意点を明らかにする」の2点である。

イタリア語を母語とする1名に12組の日本語表現(後述)を、それらの表現が用いられる状況説明と共に示した。その際、日本語話者のモデル音声もあわせて提示した。そして「12組の日本語表現について、日本語の知識をまったく持たないイタリア語の母語話者にとって、母語の感覚で発音することが容易で、かつ、日本語らしく聞こえるようなローマ字表記を作成してほしい。その際、既存のローマ字表記や日本語の正書法などは、まったく考慮しなくて良い」と依頼した。これによって得られたデータを<表記データ>とする。

その後、協力者が作成した<表記データ>について、「なぜそのように表記したのか」「表記にあたって迷ったところ、難しかったところはどこか」などについて、協力者に自由に語ってもらった。これによって得られたデータを<プロトコルデータ>とする。

3 結果

上記の手順で得られた<表記データ>は、次の通りである。

表 1 調査で得られた<表記データ>

| | |
|----|--|
| 1 | すみません、ここって無料の Wifi ありますか Sumi-ma-sen kokottè muriòo no Wifi arimaskà? |
| 2 | 別々でお願いします。 Betsu betsu de onegai shimàs |
| 3 | あの一、これ使えますか。 Anoo core tsukàe-maskà? |
| 4 | 一括で。 Ikkatsu de. |
| 5 | これ温めてもらえますか。 Korè, àtata-metè moràe-maskà? |
| 6 | 雨が降らなくて良かったですね。 Ame ga fura-nakte yo-katta des ne. |
| 7 | みんな同じ格好だから、子どもがどこにいるかわからないですね。 Minna onagi kakkòo dakarà, kodomo ga doko ni iru ka uàkara-nai des yo ne |
| 8 | ご質問ありがとうございます。 goshitsu-mon arigatòo gozai-mas |
| 9 | お答えになっていますでしょうか。 Oko-tàe ni natte imàs deshòo ka |
| 10 | ありがとうございます。今後の課題とさせていただきます。 Arigatòo gozài-mas.Kongo no kadai to sasète itadàki-mas. |
| 11 | 見た、見た。 Mita mità. |
| 12 | いま記録更新中なんですよ。 Ima,kiròk kòoshin-chùu nan deshò. |

上記の<表記データ>からは、次の4点が特徴としてあげられた。

- (1) 母音の無声化が[u]の脱落によって示されている。 例：shimàs
- (2) 拗音が母音の組み合わせ[io]と表記されている。 例：muriòo
- (3) ワが、[wa]ではなく[ua]と表記されている。 例：uàkara-nai
- (4) アクセント記号によってプロソディが示されている。 例：Mita mità

4 考察

3に述べた<表記データ>と特徴は、英語話者を対象とした調査(小林・藤井・柳田 2014)とは多くの点で異なっていた。よって、日本語の発音を表示するためのローマ字表記は、「学習者の母語を最大限に配慮し、母語ごとに開発されるべきである」ことが検証された。

<参考文献>

- 小林ミナ・藤井清美・柳田直美 (2014) 「会話教材における発音表示」シドニー日本語教育国際研究大会 (SYDNEY-ICJLE2014) (シドニー工科大学, オーストラリア)
- 小林ミナ・藤井清美・柳田直美 (印刷中) 「会話教材におけるローマ字表記-英語/イタリア語の母語話者を事例として-」, 『早稲田日本語教育学』第19号, pp.1-19.
- 野田尚史・中北美千子・島津浩美・宮崎聡子 (2015) 「日本語以外の文字による日本語音声表記 (パネル発表)」, 『2015 年度日本語教育学会秋季大会』(沖縄国際大学, 日本)